

ちょっぴり

暮らし豊かに

水しぶきを浴びて ラフティングに挑戦

今回の『ちょっぴり暮らしゆたかに』はいつもの内容とは少し趣向を変え、アクティブな内容をお届けしたいと思います。

先日、新聞でふと目にしたラフティング体験会の記事を読み、とても興味が湧き、早速申し込みをしました。体



▲白い波を前にパドルを持つ手に力が入ります

験コースは安曇野市を流れる万水川より、穂高川と高瀬川の3川の合流地点を経て犀川に入り、明科までの10キロをラフティングボートで下ります。

梅雨の真ただ中ということもあって、天気予報では長期間、雨マークとなっていました。台風でも来ない限り決行とのことでしたので、覚悟を決めました。やはり、当日は朝から雨が降っていました。

ライフジャケットとヘルメットを着し、パドル（櫂）の漕ぎ方の説明を受け、いざボートへ！

万水川は、このところの毎日のように降る雨により、川いっぱいまで増水し、流れも速そうです。

恐る恐るボートに乗り込み、掛け声に合わせてパドルを漕ぎ、流れに乗

ります。万水川へ流れ込む何本かの湧き水による川は透明度抜群で、川底の石や流れに負けまいとしがみつくように生えている川茂が揺れて見えます。

両岸の草むらには黒くて大きな羽根をもった、まるで蝶を思わせるようなトンボがパタパタと飛んでいます。こ



▲大王わさび農場付近の万水川にて

のトンボはハグロトンボとアオハタの2種類で、とても似ていますがお腹が青藍色に光っているのがアオハダトンボだそうです。

水生植物が繁茂する清流にのみ生息するカワトンボで、絶滅が危惧されています。

霧雨のなか、水面には霧が立ち、大きなクヌギの木の枝が垂れ下がり、両側の林からはサギの鳴き声が聞こえてきます。たくさんサギのねぐらとなっているようです。普段では決して味わえない、幻想的な光景に目を奪われます。

犀川に合流し川下りも最終地点間近

になると、大きな岩を避けながら、うねる流れに歓声をあげ、スリル満点！壮大な北アルプスの眺めは確認できませんでしたが、雨天ならではの景色や体験ができました。

ガイドさんには楽しく、しかも安全に案内していただき、到着地点まで無事たどり着くことができました。

今回のラフティングにご一緒させて頂いた京都からのお客様は、安曇野の自然の素晴らしさに魅了されたようです。私たちも、まだまだ見たことのない素晴らしい自然や楽しみ方があることを知りました。そして、この豊かな水は安

曇野の地を潤し、わさびの栽培、ニジマスや信州サーモンの養殖などに利用され、たくさん恩恵を受けていることを実感しました。ラフティングは、心を一つに協力しながらゴール目指すスポーツ。5歳から参加可能ですのでご家族でのレジャーにお勧めです。ぜひ挑戦してみてください。

霧雨のなか、水面には霧が立ち、大きなクヌギの木の枝が垂れ下がり、両側の林からはサギの鳴き声が聞こえてきます。たくさんサギのねぐらとなっているようです。普段では決して味わえない、幻想的な光景に目を奪われます。

犀川に合流し川下りも最終地点間近

Information

Alps Line Cruise

<http://www.alpslinecruise.com>

■電話 0263-50-6756

アルプスラインクルーズ 検索

ゆたか

vol.13

発行日：2021年10月



山共建設株式会社

— 創業大正10年 —

〒399-8102
安曇野市三郷温 3350
TEL. 0263-77-3161
<https://www.yamakyo-k.com>
✉ kentiku@yamakyo-k.com

おかげさまで



100th Anniversary
Since 1921

お客様の声

古民家の教え

瀧澤 功 様

（松本市 麓庵かつ玄）

三十年前、建屋当主、建築家、大工職人衆の素晴らしい方々との出会いをご縁に、築一五〇年余の古民家と遭遇。以来、建物の力と美しさに圧倒され、見えない迫力に教えるを請いつつ、空間力のなすがままに料理屋として商いをさせていただく覚悟ができました。

この民家建築に関わられた江戸後期と思われる大工職人の知恵と技術、更に感性の奥深さは表現に難しく敬服あるのみです。

当時においては建築学もなければ、その定義もない。唯々

職人の無意識の美を含んだ心意と鍛錬から建てあげたものと思われま

す。

古民家を活用して

の商いは料理を作る

心構えも、花を飾る

所作振る舞いも、常に

建屋の空間との会話

によって、また昔人の

想いと相談の上やら

せてもらう心得が欠

かせません。

商いの内容はとも

かく、建屋に対して謙虚であること。とすると、数学経営が先行し当事者の心から美感が消えるときがあります。おのずと過度な装飾、看板などがその景観を阻害します。古きものへの愚弄は、経営の危機を生む傷口となりやすく方向を見失います。

古きものは尊いもの。古民家に対峙したとき自ずと頭が垂れ、従順に従わざるを得ない強さと堂々感は、畏敬の念を隠せません。

日常、建屋に居するだけで歴史の重みを受け、人工物でありながら自然美を見るような不思議を感じます。

しかし、この想いを他者に継承するのは困難で、見えない美しさの表現や歴史観は言葉では伝達しがたく、知識や理屈ではない素直な直観力が個々に望まれます。

「佇まい」とは、それなりの風景の中にあつて、表現できる美しく質素な言葉ではありませんが、荒んだ光景の中では該当しません。

古民家の古民家たる成立は「佇まい」といえる環境に立地するかによって、その深みは大きく変わり、先人はこれを大変に重要視しました。必ず「庭」が建屋を包むように樹木、草、石、水によって、背景を創作しています。時代とともに「庭」は縮小され、現在では新築家屋の多くに、緑木を見かけなくなりました。心の余裕は求めなくなったようです。

日本古民家が「最大の民芸品」と言われる由縁は、全てが無名の職人（大工）の鍛錬から生まれた技術力と感性によって作られたこと。そこにはデザインという軽薄さは微塵もなく、余分な装飾や虚栄が見えず、作意の無い美しさを持っている。長年の風雪と使用に耐え続けている姿は、正に『民藝の心』そのものと言えます。

その民芸品の中で働かせてもらうことの重みは、尋常ではなく厳しい覚悟が必要です。反面、空間からほとばしる懐の深さ偉大さは、優しさと勇気を与えてくれます。

この古民家は本来、建築時の一親族に限って使われるはずでしたが、時の流れ事情によって用途が変更され、保存の目的もあつて「商店」として再生。一五〇年の歴史とは全く環境が異なり、不特定の人出入りが常となった今、建物及ぼす吸引力、影響力は多大で計り知れないものがあります。

商人の使命として、一八〇年前の佇まいと想いを消すことなく、末永く建屋として無事に使わせていただくことが、商いを守る本道であり、古民家に対しての礼儀である心がけています。



▲変わらぬ佇まいを残す「商店」麓庵 かつ玄



店主 瀧澤 功 様▶



R3年4月
さくら満開

今年は社屋の改修工事に続き、長年倉庫として使用していた旧事務所の建物を取壊し、駐車場を新設しました。

駐車場整備にあたり、大きな桜の木が一本あるのですが、降幡会長が八十歳の記念にと植えられたもので、切ってしまうのはあまりに忍びないとの思いに残されることになりました。

今までは建物の陰で、隠れるように咲いていた桜ですが、今年は枝葉を思いきり伸ばして、見事な花を見せてくれました。会社の2階より見た素晴らしい景色に、思わず撮った写真です。パチリッ！



R3年4月
長野県SDGs推進企業と「社員の子育て応援宣言」に登録しました



最近、関心が高まりつつあるSDGsですが、弊社におきましても推進企業(第8期)として登録されました。

「社会」「環境」「経済」の3側面に紐づけられた169の達成基準から、環境と社会に重点を置き、具体的な目標を掲げ、達成に向け取り組みます。

■達成に向けた具体的取組

新建材を使用した建築物が増えるなか、長野県の気候風土に合った民家の良さを生かし、代々受け継いできた住む人の想いを大切に、快適で現代の生活に適合した住宅への再生事業を行い、歴史と文化の継承に努めます。

■社員の子育て応援宣言

社員が育児や介護などへの参加ができるよう、休暇を取得しやすい環境づくりに努めます。



R3年7月
最新の測量技術 UAV測量技術を採用

長野県は土木建設現場の生産性向上に向けて、測量・設計から施工、さらに管理にいたる全工程の情報化を図っています。

当社においても測量において「UAV測量」を導入しています。UAVとは、ドローンなどの無人航空機などの総称で、自動航行アプリを使用し、スペックを考慮したうえで、設定を最適化、機体GPS機能を利用して、あらかじめ設定された飛行範囲や経路を、自動で航行して測量を行います。

UAVには、LiDAR(ライダー)という計器が搭載されています。LiDARからレーザーが照射され、対象までの距離・反射強度を計測しています。

UAVレーザー測量は1秒あたり約10万点の大量のレーザーを照射し、対象物からの反射情報を記録することでデータを取得します。植生のある地域上空からレーザーを照射した場合、一部のレーザーは樹木間をすり抜け地表面まで到達し地表データを取得する事ができます。これにより地形を詳細に3Dデータ化し、直感的に把握できるようになり、工事全体の把握や出来高管理を効率化することが可能になります。

また直接対象物に触れずに計測するUAV測量は、近寄ることができない場所や触ることができない物でも測定できるため安全性・生産性が確保できます。



▲地形を撮影する 3D カメラ



▲大きな鳥が翼を広げたようなドローン機体幅 1.6m

山共建設「協力会」京都研修について

日本の茶室研究の第一人者、京都の中村昌生先生による研修が、毎年行われていることを知った京都の建築関係者は、どんなに驚かれたか知れません。

「先生は、一般の企業の講演、研修会等は全て断られておられるのに、なぜ信州の会社のために…」と言って。

事の始まりは、当時中村先生が京都工芸繊維大学助教授の時でした。隣の豊科へ、先生の設計なさった住宅の工事を、我が社で施工させて頂いたことからです。

工事が終わった後、地元の茶道の先生のグループが、中村先生の「お茶室」のお話をお聴きする会を催したいとの希望があつて実現し、その席へ住宅工事に携わった我が社の社員と職人が、参加させて頂くことができました。

講義をお聴きして、「伝統建築の勉強をすべきなのは、私たち自身なのだ」と感じ、こちらから京都へ出向いて、中村先生による伝統建築の勉強をさせて頂きたい旨を申し上げ、実現したのです。

その第1回は、昭和48年(1973年)京都国際会議場 北山丸太・龍安寺・多治見タイル工場。第2回は、昭和49年(1974年)東京で施工の住宅・国会議事堂・歌舞伎座観劇等。このように、平成29年の第45回(2017年)まで毎年

続きました。

45年間の長きにわたり、毎年研修会が行われてきたことは、他には例がないのではないのでしょうか。

それは中村先生が、遠い信州の田舎から京都や東京等各地へ勉強に向く職人の熱意に心打たれ、更にその成長の姿に、次の研修会への意欲が増していかれたようでした。

研修先は、中村先生が新たな学びができる場所を選んで下さり、毎回30〜40名が参加し、早朝、山共建設を出発10時京都着。2泊3日の日程で行われ、初日より三日目の15時頃までみっちり見学し、20時頃松本着という旅程でした。

京都以外にも、東京、大阪、奈良とその周辺でも14回開催され、主として建築関係者として学んでおきたい文化財の建物の、重要な復元工事の現場なども、我々の再生工事の参考にと、ご準備下さいました。

このような研修旅行でしたから、参加した全員が心満たされ、喜びを胸に帰途に就きました。帰りの車中は、それぞれの見学場所で学んだ思い出を語り合い、意見交換の貴重な教室となりました。

そして、一人ひとりととつて特別な三日間でしたから、それぞれの人生に大きな影響を与え、誇りを



▲中村昌生先生(右手奥)の講義の様子



▲2015年3月清水寺 釈迦堂前にて

持つ結果をもたらしたことでしょう。

「山共建設の人たちは、他の建設会社の人たちとは違いますね」という声を、各所で聴きました。また、「社員同士の気持ちは合っているから、良い仕事ができると思います」とも。

中村先生が亡くなられた今、45回の研修旅行を振り返り、「日本の伝統建築のために、日本の中央にあつて、いつまでも頑張つて下さい。期待しています」とおっしゃっていたお姿が思い出されます。

病床から私に下さった最後の手紙に、そのことが伺いでき、涙が溢れ出しました。

そして、「中村先生からご指導頂いた、研修旅行を続けます」と叫び、その決心をしたのでした。

(終)

文・山共建設会長 降幡廣信